



# 山中 恒 さん

町田市に住んでいたことのある児童読物作家 やまなかひこ さんの本を紹介し  
ます。文学館や図書館で閲覧・貸出できます。ぜひ手に取ってみてください。

## 作家紹介

1931年北海道小樽市生まれ。早大童話会にて、本格的に子ども向けの作品の執筆を開始する。

「赤毛のポチ」が1956年に日本児童文学者協会新人賞、1960年に児童福祉文化賞を受賞。1978年、「山中恒よみもの選集」全10巻（後に20巻まで刊行）により、第1回巖谷小波文芸賞を受賞。1993年、『とんでろじいちゃん』が第31回野間児童文芸賞を受賞。『あばれはっちゃく』や『ぼくがぼくであること』がテレビドラマ化、『おれがあいつであいつがおれで』が「転校生」として映画化されるなど、多数の作品が映像化され幅広い年代に親しまれている。子どもが楽しんで読めることを第一に考え、作品が新装刊される際には時代に合うように手を加えている。童謡「インディアンがとおる」「はしれちょうとつきゅう」、テレビドラマ「あばれはっちゃく」の主題歌「タンゴむりすんな」などの作詞も手がけている。

戦時資料の蒐集家でもあり、膨大な資料をもとに、教育をはじめ戦時下の子どもにまつわる状況を検証した「ボクラ少国民」シリーズなど、大人向けのノンフィクション・研究書でも高い評価を受けている。

町田市には1964年から1983年までの約19年間暮らした。

## 作品介绍

### 『とべたら本こ』 絵・岩崎ちひろ（1960年、理論社）

競馬で大穴を当てたことがきっかけで、主人公・吉川カズオの生活は一変。父が酒びたりになり、守銭奴と化した母にはあらぬ疑いをかけられる。家を出たカズオは、様々な事件を経て大人の欺瞞に気づいていき、最後に自分の居場所を選択する。

初めて刊行された著作。この頃、家庭崩壊や大への反抗を描いた子ども向けの読物が出版されるのは異例のことだった。当時山中は、自身で創立した広告代理店が倒産したことが原因で、電車賃も用立てられないほど苦しい生活をしていた。義理の妹だった女優・三笠博子の家で留守番をしながら、「わずかな自尊心の支え」のために本作を執筆したという。



### 『赤毛のポチ』 絵・しらいみのる（1960年、理論社）

炭坑町の長屋に住む少女・カッコと、家族や同級生、教師ら大人たちとの人間模様が、赤毛の犬・ポチをめぐるエピソードを通じて描かれる。

鳥越信、古田足日、神宮輝夫らとともに結成した「小さい仲間の会」の機関紙「小さい仲間」に、1954年から連載。それまでの日本児童文学にはなかった少年少女向けのリアリズム長編作として連載中から注目を集め、鳥越が様々な出版社に掛け合った末に、出版にこぎつけた。

### 『オニの子ブン』 絵・長新太（1968年、理論社）

ツノもキバもなく青白い顔をしたオニらしくないオニの子・ブンは、地獄から追い出されてしまう。飛ばされた地上の世界で、囚らずも人間の男の子・ブンタロウの中に入り込んだブンは、しばらく人間になっていようと決め……。

本作の原稿を児童文学者協会に提出したところ、ある編集委員から「ナンセンス！おはなしにならない。マンガを文字にしたからといって児童文学にはならないぞ！」という鉛筆の走り書きをつけて返されたというが、再刊を重ね子どもたちに愛されている作品。

## 『天文子守唄』 絵・鈴木義治（1968年、理論社）

応仁の乱の時代。京で町衆を殺して金品を奪っていた鬼童丸の前に現れたのは、母を殺されたムササビと名乗る男の子。復讐を誓ったムササビだが、鬼童丸を追いつめたとき彼の母親のことを聞くうちに、許す気持ちになる。一緒に行動するようになった二人のところに、領主・守泉がやって来て……。 「あがた・じゅん」というペンネームで発表した作品を改稿して刊行。1969年に第9回児童文学者協会賞に選ばれたが、この年に方向性の違いから同協会を退会しており、受賞も辞退した。

## 『めたねこムーニャン』シリーズ 絵・石坂啓（小学館、全5巻）



『めたねこムーニャン』（1989年）

『大あばれ！めたねこムーニャン』（1990年）

『くいしんぼ！めたねこムーニャン』（1991年）

『あわてんぼ！めたねこムーニャン』（1991年）

『大変身！めたねこムーニャン』（1992年）

アミちゃんの家で飼っているムーは、車にひかれてぺっちゃんこになってもポンプでふくらませば元に戻ったり、ねずみが映っているテレビを飲み込んで真四角の形になったりと、めちゃくちゃなねこ。アミちゃんに化けて、騒動を起こすこともしばしばで……。

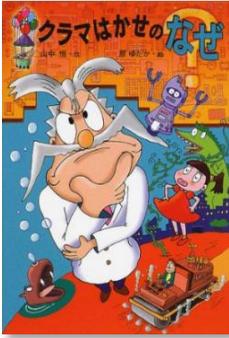
ばけねこムーニャンと繰り広げられるドタバタな日常を、アミちゃんが友だちとおしゃべりするような口調で語っていく。

## 『八月の金貨』 絵・松本大洋（1992年、あかね書房）

小学校5年生の研治は、夏休みにいとこの信子や友だちと、遠い親戚の家に泊まりに行くことに。昔、泥棒が隠した金貨があるという暗闇沢に行った研治と信子は、足を踏み外して谷底に落ちてしまう。気がついたときにそばにいた少年は、自分は国民学校初等科の6年生で、ここには疎開に来ていると言い……。

子どもと戦争の問題が描かれているが、ミステリー要素も楽しめる作品。





## 『クラマはかせのなぜ』

絵・原ゆたか（2001年、偕成社）

割れないシャボン玉や、動物の鳴き声を人間の言葉に変える機械などを次から次へと発明する天才・クラマ＝ジュウロウはかせ。世のため人のためと一生懸命なのに、いつも子どものいたずらのような結果になってしまって……。みんながあつたらいいなと思うものを作るのに、騒動になってしまうのは、なぜ？

初版は1968年（学習研究社）。その後何度も新装刊されている人気作。

## 『ぼくがぼくであること』 絵・庭

（2012年、角川書店）

「いちばん秀れている」という名まえの秀一だが、優秀な兄弟とは違って出来が悪く、いつも母から小言ばかり聞かされている。夏休みにしごかれてうんざりした秀一は、家出を宣言。でも、家族にちゃかされた上、おしゃべりな妹のせいで近所中に知れわたり、「きみ、家出するんだって？」「おみやげ買ってきてね」なんて言われる始末。形だけでも家出をしないといけなくなった秀一は、駐車してあった小型トラックの荷台に乗り込んだが、なんとその車がひき逃げを起こし……。たどり着いた先で出会った老人とその孫・夏代との生活、様々な事件を経て、秀一は母にありのままの自分を認めてもらおうとぶつかっていく。



初版は1969年（実業之日本社）。「教育ママ」が社会現象になっていた当時の背景が如実に表れた作品だが、自我の芽生えや家族との関係などの普遍的な問題は子どもたちの心を捉え、現在まで読み継がれている。1973年、2005年にはNHKでテレビドラマ化されている。



## 『おれがあいつであいつがおれで』

絵・杉基イクラ（2012年、角川書店）

小学6年生の齊藤一夫は、ひょんなことから幼なじみの齊藤一美と中身が入れ替わってしまった。まじめに話しても周囲の人は信じてくれないため、何とかお互いになりきって生活してみるものの、「様子がおかしい」「もっと女の子らしくしなさい」などと言われてしまい……。

初版は1980年刊行（旺文社）。担当編集者から「勉強疲れした読者が、げらげら笑って、情緒解放できるようなもの」がいいとの注文を受けて書いた。発表当時の児童文学界での反応は惨憺たるものだったというが、男女の性差を自覚していく戸惑いをコミカルに描いたことで、読者からは多くの共感を得て現在も読み継がれている。大林宣彦監督により、1982年に「転校生」、2007年に「転校生—さよならあなた」として映画化された。

## 『六年四組ズッコケ一家』 絵・うみこ（2013年、KADOKAWA）

6年4組にある4つの班のうち、「ズッコケ一家」と名づけられた班のメンバー12人は、揃いも揃って変わり者ばかり。自分が忘れっぽいことまで忘れてしまう忘れ物の王者「ワスレノスケ」、誰も手に負えない超泣き虫の「ナニセ・ナキエ」、一万の話をしゃべってもその中に本当のことがないほどのうそつき「マンカラ」、お調子者でオッチョコチョイの「ミスター・チョイノ」、ニュースをキャッチするのが早い情報通の「キキ耳ズキンちゃん」…。休みなく巻き起こる事件に、担任の立野光子先生も校長先生も大わらわ。



1章ごとに、一人ずつに焦点を当てたエピソードが披露される。「ズッコケ一家」のメンバーと一緒に、はちゃめちやな学校生活を楽しんでいる気分になれる楽しい作品。

『あばれはっちゃく 一ワンぱく編—』 絵・うみこ(2014年、KADOKAWA)

『あばれはっちゃく 一ツーかい編—』 絵・うみこ(2014年、KADOKAWA)



あばれはっちゃく(手のつけられないあばれもの)の桜間長太郎が学校や家庭内で織り成す日常を、ユーモラスにテンポよく描いた作品。ガキ大将の長太郎は、正義感を持って悪い大人をやっつけたり、女の子の気を引くために奔走したりと親しみやすいキャラクターで、幅広い世代に愛されている。1970年から「よみうり少年少女新聞」に連載された。初版は1977年刊行(読売新聞社)。1979年からはテレビ朝日により連続ドラマ化され好評を博した。角川つばさ文庫版は、現在の子どもたちになじみのない言葉や物価の違いなどについて、山中による注が付けられている。

『この船、地獄行き』 絵・ちーこ (2014年、KADOKAWA)

不注意から家のテレビを壊してしまったカズヤは、家出を決意。そこへ、同級生のマコトが写生をしようと誘いに来て、港公園に行くことに。カズヤは貨物船の絵を描き始めたが、うまく描けずに赤いクレパスで塗りつぶしてしまう。すると、船が爆発しているように見えるその絵を、怪しい中年の男が買い取ると言ってきた。拒んだカズヤともみ合いになる男。マコトはカズヤを助けようと男を殴るが、男は血を流して動かなくなってしまう。パトカーのサイレンの音を聞いた二人は、外国に逃げようと考えて出航間近の貨物船に乗り込むが、実はこの船がとんでもない船で……。



初版は1976年(文研出版)。角川つばさ文庫版では、時代に合わせて細かな点が修正されているほか、「もう少し長くしてほしい」という編集者からの要望に応じて最終章が加筆された。



## 『ママは12歳』 絵・上倉エク

(2015年、KADOKAWA)

三人姉弟の長女・小学6年生のらん子は、天国のママに代わって、やんちゃな1年生の大作と4年生の研作の「ママ」をしている。始めたばかりの工務店の仕事が忙しい父は、らん子に家のことを任せきり。日曜日も休みなく、溜まった洗濯物と格闘し、食事もカロリーや栄養バランスを考えて作って、弟の成績や体調も気にしながらがんばっているのに、死んだママの妹・はま子はいちいちケチをつけてくる。実ははま子は、イケメンのパパを狙っているのだ。弟たちはおもちゃや外食で簡単に手なずけられてしまうけど、わがままで自分勝手なはま子おぼさんがママになるなんて、絶対に我慢ならない。それでも、主婦の座をさっさと明け渡したいらん子は、次々と巻き起こる事件に対処しながら、パパのお嫁さん探しに奮闘するけれど……。

1977年刊行の『ちびっ子かあちゃん』(読売新聞社)改題。

## 『とんでろじいちゃん』

絵・そがまい (2017年、童話館出版)

夏休みの間、ぼけてきたおじいちゃんのところへ行って、変なことをしないように見張るよう言いつけられたユウタ。おじいちゃんに、メダカやドジョウをすくいに行こうと誘われるが、昔あった小川はなくなってしまっているためユウタは半信半疑。でも、おじいちゃんに言われるがまま目をつぶって息を止めると、あたりには木々が広がり、そばには時代劇に出てくるような格好の男の子がいて……。ユウタはおじいちゃんと一緒に不思議な世界を歩き来しながら、小指のない仏さまの謎を解く。



初版は1993年(旺文社)。第31回野間児童文芸賞受賞。大林宣彦監督により、1999年に「あの、夏の日～とんでろじいちゃん」として映画化された。



## 『ママ父ロック』 絵・コザクラモモ

(2017年、ポプラ社)

パパと離婚したママは、〈ものかきや〉の雪影先生のマネージャーになった。となりに越してきた雪影先生は、あたしやお姉ちゃんとも仲よくなって、ママと再婚することに。雪影先生は「ママ父」で、あたしは「連れ子」。でも、そのことを言うと、みんなびっくりしたような困った顔をする。

小学校3年生の美布由の一人称で語られ、「雪影先生」の呼称は、物語の進行とともに「おとつあん」「おとうさん」と変化していく。初版は1992年(偕成社)。家族構成が山中自身のものと似ているが、あくまでもフィクション。

## 『わたしの家はおばけ屋敷』

絵・ちーこ (2018年、KADOKAWA)

小学4年生のマイは、生まれたときからおばあちゃんと二人暮らしをしていたが、おばあちゃんが死んだ後、お父さんが再婚するのを機に一緒に暮らすことになる。新しいママには、マイと同じ年の男の子・シュウがいた。シュウもマイと同じ境遇で、ママとは離れて育ったという。一家は「幽霊屋敷」と呼ばれる洋館を新居とするが、シュウが自分のママのことを

「あの人は、お袋じゃなくて……魔女かもしれない」なんて言い出して…。さらに、マイとシュウの周りには、偶然とは思えない奇妙な一致が。果たして、ママの正体とは？

1997年刊行の『幽霊屋敷で魔女と』(理論社)改題。家を舞台に、自分の親に対する疑念を絡めたスリリングなストーリーで、ミステリー要素の濃い作品。





## ●「山中恒児童よみもの選集」(1977-1989年、読売新聞社、全20巻)

- |                        |                |
|------------------------|----------------|
| 1. 『あばれはっちゃく 上』        | 11. 『カンナぶし』    |
| 2. 『あばれはっちゃく 下』        | 12. 『たまたまタマオ』  |
| 3. 『六年四組ズッコケ一家』        | 13. 『おへそに太陽を』  |
| 4. 『くたばれかあちゃん』         | 14. 『ぼくがもうひとり』 |
| 5. 『のん・たん・びん』          | 15. 『おさげの騎士』   |
| 6. 『ちびっ子かあちゃん』         | 16. 『行け黒潮の子』   |
| 7. 『たか丸くもがくれ』          | 17. 『北斗の歌』     |
| 8. 『リボンのムツ五郎』          | 18. 『ごらく三次』    |
| 9. 『ゆうれいをつくる男／てんぐのいる村』 | 19. 『ちびっこつぶて丸』 |
| 10. 『ぺてん師つむじの仙太郎』      | 20. 『ムサシ早手流』   |

山中は本選集により、1978年に第1回巖谷小波文芸賞を受賞した(この時点で全10巻であったが、後に続編が刊行され全20巻となった)。



## ●「山中恒よみもの文庫」(1995-2004年、理論社、全20巻)

- |                   |                      |
|-------------------|----------------------|
| 1. 『くたばれかあちゃん!』   | 11. 『おれがあいつであいつがおれで』 |
| 2. 『この船じごく行き』     | 12. 『なんだかへんて子』       |
| 3. 『おへそに太陽を』      | 13. 『ムサシ早手流』         |
| 4. 『あばれはっちゃく』     | 14. 『めたねこムーニャン』      |
| 5. 『六年四組ズッコケ一家』   | 15. 『のん・たん・びん』       |
| 6. 『クラマ博士のなぜ』     | 16. 『ママはおぼけだって!』     |
| 7. 『幽霊屋敷で魔女と』     | 17. 『ねえちゃんゲキメツ大作戦』   |
| 8. 『背後霊倶楽部』       | 18. 『こんばんはたたりさま』     |
| 9. 『ぼくがもうひとり』     | 19. 『背後霊内申書』         |
| 10. 『トラブルさんこんにちは』 | 20. 『ピョンとオバケン』       |

『こんばんはたたりさま』『ピョンとオバケン』は書き下ろし。『ねえちゃんゲキメツ大作戦』は『カンナぶし』の改題。



『赤い靴』 絵・東逸子（福音館書店、1992年）

山中自身の実体験に基づいており、初稿は早大童話会時代に執筆された。絵本化に際し、物語の素材となった人形のことを画家の東逸子に話したところ、当時敵国のアメリカ製だと思われていた人形は、ドイツ製のビスクドールであったことがわかった。

『ハルばあちゃんの手』 絵・木下晋（2005年、福音館書店）

時代によって移ろう社会の中で懸命に生きる一人の女性の一生を、手に焦点を当てながら追った絵本。画家の木下晋（町田市内在住）が、富山の漁村に住んだ実在の人物をモデルに描いた絵に、山中が文章を付けた。山中は執筆のため、当時の雰囲気が残っている能登半島輪島に取材に行っている。



読んでみたい本があったときや、ここにのっていない山中さんの本について知りたいときには、文学館や図書館カウンターの職員にお声がけください。



